

た

the presentation of
1999

告



SHOP 2

若者の「つながりたい願望」は
一種の「流通願望」なのだろう
と経済学者の西部忠さんが言うので

KOHKOKU Sep.-Oct.

9+10

お店がわたし

LETS! 「コミュニケーション」 自分らで「お金」 つくってもいいんですか?!

いいんです



photo: KAZUKI Tajika

だったら「もう一つの お金」をつくろう

「お店がわたし」の担い手の多くが、やりたいことだけをやって経済的に自立できているわけではなく、生活のためには他の仕事にも就かざるをえないのが現状です。フリマに集まるアート系フリーターも、シフトに作品を寄せるウェブデザイナーも、コミケで生計を

立てる漫画家も「食っていけない」境遇は同じでした。

経済のダイナミズムの位相は明らかに変わっているのに、实体经济の構造は相変わらず——そこに風穴を空ける様々な試みがなされているもの——既得権益の側に有利にできているから、そつちに溜まっているお金がなかなか流出してくれません。「お店がわたし」な人たちの間で回るお金

の絶対量はそもそも限られているわけです。ある意味で、彼らの行動を支える交換欲求は、従来の消費欲求以上にお金を必要とするにもかかわらず、です。

だったら、いっそ、「自分らでお金をつくるしかないじゃん」と割り切るのもアリなのでは!? 賈金づくり、という物騒な話ではありません。

「わたし」は蓄財のためにお金が

ほしいのではありません。「わたし」に価値を見出してもらった証しとして代価が支払われればいい。もちろん言えば「わたし」が他者と「コミュニケーション」できた記録（記憶）が数字としてのこればいい。逆に今度は、その数字が他の「わたし」との「コミュニケーション」ツールになればいい……。と、その程度の役割をお金に期待しているにすぎません。そういうお金なら、何も日本銀行券でなくてもいいはず。日本政府のお墨つきがなくとも、利子という付加価値をもつことがなく、それが純粋に交換のためだけに使われるのであれば、何ら法律に抵触することもないのです。

自分たちで勝手に、「もう一つのお金をつくらう」という発想。実は、その考えは、すでに世界各地で実践されていたのです。

地域通貨制度「LETS」の仕組み

もう一つのお金は、ちゃんとし

たシステムに支えられていて、それにはしゃれた名前がありました。「LETS」といいます。「Local Exchange Trading System」の略称で、地域通貨制度という意味に解すればいいでしょう。円やドルといった国民通貨に対抗するもう一つのお金が、地域通貨というわけです。地ビールならぬ「地マネー」と言えばわかりやすいかも。文字どおり、地域でお金を発行・管理しようという発想です。

LETSは1983年にマイケル・リントンという人がカナダのコモククスヴァレーで創設したのが始まりで、現在、全世界で200以上の地域が固有の地域通貨をもち、各々の規模でこのシステムに取り組んでいるとされています^{※3}。

システムといっても従来の制度観とは大違いで、LETSの日本への導入に意欲的な経済学者の西部忠さんは「国や地方の政府が中央集権的に設計構築し、上から押しつけたら、与えたりする制度やシステムではなく、一人一人の

意志と行動により自発的かつ散的に生成されてくるようなシステム」と、そうLETSを定義しています。また、地域（Local）といつてもリアルな物理的エリアだけに限定されなくてもよいと西部さんは考えます。たとえばリウオッチ（22ページ参照）のサイトに集まってくるリサイクルに関心のある人たちのヴァーチャルなネットワークでもOKというわけ（さらに、電子マネーを普及させるにはLETSこそ最適という見方も）。ご近所の関係でも、共通の趣味や考え方をベースにしたつながりでも、具体的に「自分たち」とくくれる何かがあれば、LETSはどんなところででも始められます^{※4}。

以下、西部さんの言葉を借りながらその概略を説明しましょう。LETSとはつまり、参加者が財・サービスを自発的に取引しあう自律的なネットワークであり、固有の貨幣を各個人が発行・管理しながら利用する仕組みのこと。LETSの参加者は、①ま



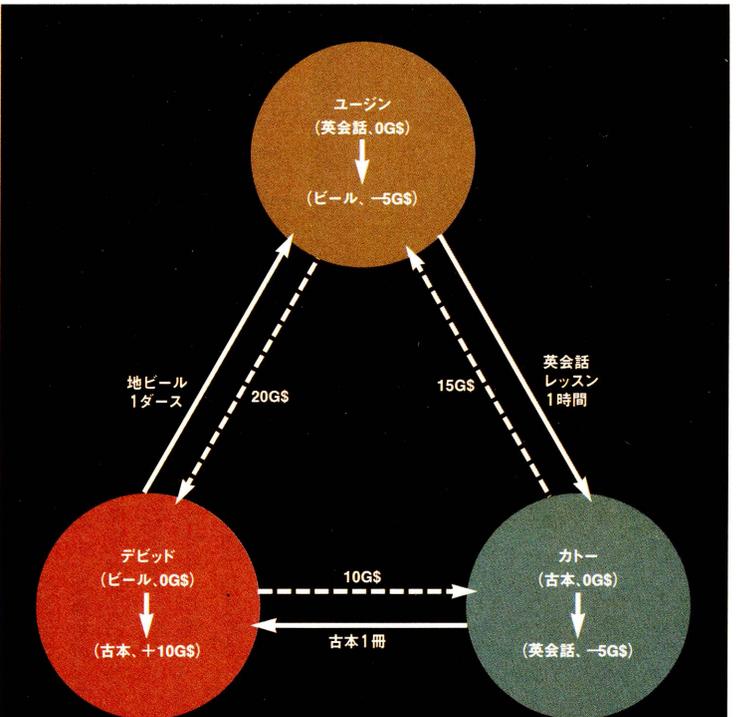
call !!!

HIDEKI INABA Design

03 33 74 71 92

inaba@t3.rim.or.jp

306 5-42-15 Honmachi Shibuya-ku Tokyo 151-0071 Japan



●実線矢印は、財・サービスの流れを、点線矢印は地域通貨の流れを表す。
●丸内の二つの丸カッコは参加者の財・サービス及び地域通貨の保有状況(上段が全取引前、下段が全取引後)を表す。

- ※1 もちろんLETSは、従来の国民通貨を否定するために生まれてきたわけではありません。ただ、資本のグローバル化や投機化がもたらす災禍から地域経済を守り、その安定的で自律的な成長のために必要な方途とされています。
- ※2 「地マネー」は西部さんのネーミング。
- ※3 とくにイギリスでLETSは急成長をつづけており、2005年までに国内GDPの30~40%を占めると予想されているそうです。イギリスでは参加者500人規模のLETSがもっとも一般的。
- ※4 個人と個人のつながりに限定しなければ(イギリスがそうですが)、企業がLETSに参加する可能性も大いにあります。たとえば企業がある地域で公共事業を立ち上げ、その売り上げの一部を地域通貨で受け取ることにしたら、当然その「お金」はその地域で使うしかなく、再び事業や雇用などに還元されることになり、地域経済への社会貢献につながる循環が形成されることになるでしょう。

若者の接続願望と LETSのいい関係

「お店がわたし」というフレーズから、「個人商店」を連想された方もいたかもしれません。たしかに個人で店をやるという部分は同じですが、「お店がわたし」化現象とは、あくまでも「つくりたい」、売りたいが基本ですから、とすると「商」の部分がごっそり抜け落ちてしまいがち。それでいいじゃない、金儲けが目的じゃないんだからと欲張らないのも、この現象の特徴でした。「つくりたい」、売りたいの先に、自分は自分らしく人と「つながりたい」を実現できる場所としてお店をやりたいのです。

この10年くらいの間に政治も道徳も何もかもが壊れて、個がバラバラに放り出されたとき、西部さんが言うように、若者は「最終的なコミュニケーションの手段」として市場に目を向けるようになったのかもしれない。しかし、いまある現実のお金は、蓄財や投機といった、むしろディスコミュニケーション的欲望のために使われるもの。そんな余計な要素は排除して、純粹に「つながるためのお金」をもとめよう、というのがLETSなのです。

LETSはもう15年以上も前から考案され、いわゆるほとんどの先進国で実施されてきたのに、日本ではこれまで本格的に導入された例はなく、いまようやく、西部さんらの活動もあって注目されるようになってきました。実際に試みを開始したケースもあるようです。この不況下で、自治体とその関係者がにわかに関心を示すのは当然のことでしょう。しかし、地域経済の安定を助けるためのシステムというお題目より、若者のコミュニケーションを支えるためのシステムという切り口でアプローチしたほうが、いまの日本には馴染みやすいかもしれません。LETSのあり方や目指すところが、「お店がわたし」化現象をなぞるかのようになれば、若者の動向とそっくりなのですから。

自分名義の口座を開設して、口座勘定から出発し、②自らが提供できる財やサービスとその価格を目録に載せ、③必要な財やサービスを売ったら価格などの条件を交渉して地域通貨で代金を支払い、④逆に自分が目録に載せた財やサービスが売ればその代金を地域通貨で受け取るようになります。そこで使われる地域通貨は、中央銀行が発券される現金とは異なり、財・サービスを購入する人がその都度個別に新たに発行することになるわけです。コミックスヴァレーの場合、地域通貨はグリーンドル(G\$)と呼ばれ、一般の現金であるカナダドルとの交換比率を1対1と定めています。ただし、グリーンドルの現

金化は認められません。とりあえず3人寄ればLETSはできるので、ひとつケーススタディをしてみましょう(右図参照)。カトーさんはデビットさんに古本(一冊)を10G\$で提供し、デビットさんは地ビール(一箱)を20G\$でユージンさんに提供し、ユージンさんは英会話個人レッスン(一回)を15G\$でカトーさんに提供するとします。カトーさんは古本の代金10G\$をデビットさんから受け取り、英会話個人レッスンの代金である15G\$をユージンさんに支払うので、カトーさんの勘定残高は5G\$の赤字です。同じように、デビットさんの勘定残高は10G\$の黒字、ユージンさんの勘定残高は5G\$の赤字になり

ます。3人の赤字と黒字を合計すれば、そう、ゼロですね。このように全参加者の赤字と黒字がつねに相殺し合い、信用創造が発生しないのがLETSの基本。LETSでは、各参加者が何かを買い、赤字を生み出すことに貨幣を発行していると考えることができます。しかし、赤字を返済する義務はないため、参加者の間で金銭貸借の信用関係が生じるわけではありません。デビットさんが黒字をずっと保持したところが利子もつきませんし、ユージンさんが赤字を増やしつつけても個人破産を宣告されることはありません(もちろんそこに「モラルハガード」は働いてしょうが)。LETSはあくまでも、参加者個々の

信頼や倫理観に基礎を置いた(その意味で、とてもピュアな)交換制度なのです。そして、忘れてならないもう一つのLETSの特徴が、情報公開の原則。参加者は他の参加者の残高や取引高についてすべて知ることができのです。裏を返せば、個人が何を買ったか他人にはわからないというのが通常の貨幣による市場の原則ですが、LETSにおいてはそうした匿名性は存在しないということです。そこでは個人はオープンにならなければなりません。資本蓄積や投機的取引が存在しない(その意味でも、とてもピュアな)その市場「コミュニティ」へは、必ず「わたし」として、「わたしのお金」で参加するこ

つなぐたい欲求、接続願望は、いまの若者にとって、ますますリアルなものになっています。ケータイは財布よりも大事な持ち物、ブランド物なんか買えなくても通信費にかかる費用は惜しまない、そんな現状をうまく説明する言葉が大人の側にはありません。しかしケータイを前に大人が思考を停止している間に、接続願望はもっと違った展開をみせていました。

電話やメールは、所詮は二人のおしゃべりの場でありませぬ。若者はそこに接続願望の着地点を求めたりはしないのでした。つながりたい「わたし」の自己実現の場を、若者は市場に求めようとしていたのです。

どうです、あなたもフリマ仲間と試しに始めてみませんか。コンセプトは、「LETSーコミュニケーション」ということです。

フリマの 若者にみる、 LETSの 可能性の中心

西部忠



①市場は、われわれを「個」にしてくれる

労働運動ではなくとも、総じて社会主義的な運動というものは、横のつながりというか、横への連帯ということを謳い文句にして進められてきたんですね。フォーラム型の運動にしようとか、アソシエーションにしようとか、でも、そこでも問題になっていたのが、何が人を横につなぐのか、という点で、そこだけはハッキリしなかった。むしろ人は、そういう運動

自体に敵対感情をもっていたりするから、なかなか結びつきようがない。だから僕は、人と人を結び、つなげるためのメディアとして、LETSを導入するということを考えているんです。

左派系の経済学の考え方からすると、貨幣があつて流通があつて、そしてそこに市場関係があるから疎外がもたらされるといふ話になりますね。すなわち「貨幣の物神性」といふような文脈で語られる場合には、市場そのものがまったくけしからぬものであるとさ

れてきたわけですが、大雑把に言う。僕はすつと、それではダメだと思ひながら仕事をしてきてました。市場にも功罪があるとすれば、いちおう功の部分なきんとして理解した上で先に進まなければならぬと考えるようになりました。結局、経済計画というのはうまくいかないので、そうなると市場が必要であるという話になってくるんですけどね。

市場は必要である。やつぱり、われわれを「個」にしてくれるという意味で大いに必要なものだ

と思う。したがって市場における交換関係というのは、一人ひとりをもつてくれるという意味での自由主義を、広い意味でベースにしてると考えられるんですね。

ただ、通常の貨幣の場合だとそれで終わっちゃうんですけど、LETSにはそれにプラスαして、貨幣がもたないような価値が付け加えられるんです。情報公開とか、共有性とか、そういった面ですね。要するに、貨幣というメディアの場合には、それを使って一度モノを買つても、個人と個人は依然と

して他人のままである。何のつながりも生まれない。もちろん、そこにも様々な関係はでてくるでしょうが、それは、たとえば階級対立だったり、企業の消費者に対する関係などであつて、決して横の関係ではないんですね。言うまでもなく、LETSは個人と個人の横のつながりを生むはずなんです。メディアというのは、あくまでも媒体であつて、それ自体は何物でもない。地域通貨もそれ自体が価値をもつわけではないんだけれども、それがもつ仕組みやシステム

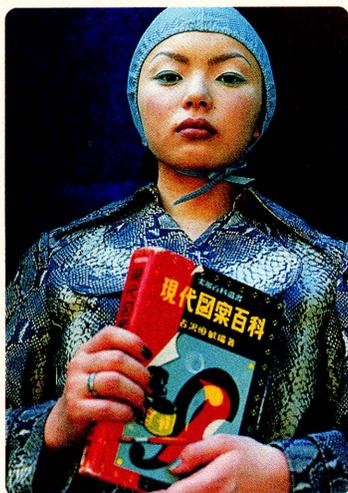
②LETSの市場は「自律分散型」

すなわちLETSがつくる市場がある一定の価値を体現するのは間違いないでしょう。

市場の考え方には2種類あつて、まず、経済学の一般均衡理論なんかを教えているような市場というのは「集中型の市場」です。それには、競り人がいてオークションをやるといふ喩えが適当かもしれませぬ。このコップを500円と競り人が叫んでくれる。そのとき「買った」という人の数と「売った」という人の数がちょうど同じになれば、それは需要と供給が一致したということであり、その後で実際の売買が行われるという考え方ですね。そのように、すべての財についていっぺんにオークションをやるといふプロセスを行なうのが、市場のもつとも一般的形態である。

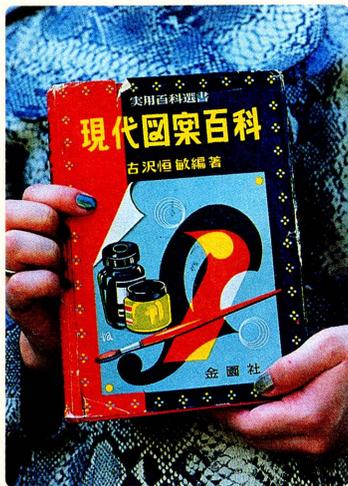
立派な広告人の為の気になる 稀少本紹介販売広告

其の参



現代図案百科
古沢恒敏編著/金國社/カバー破れ
価格巻千五百円(税込み)

其の貴 広告が文化になっていない時代、イラストレーションは商業図案と云われ、イラストレーターは商業図案家と呼ばれてきたとか、いなかったとか。さて、今回ご紹介する物件は御立派なイラストレーターさんたちには、最近まで鼻にもかけられなかった昔の素晴らしい図案集でございます。近頃は、未来を悲観してらっしゃるのさ才能の枯渇が原因なのでしょうが、レトロという美名の元に戦後戦前の無名人の図案をソックリソノママ描いていらつしやるイラストレーター連中をよく見かけます。そのような一生懸命の方達は既に同様な図案集をたくさんお持ちになつていらつしやることでしょう。そこで今回、まだお持ちになつていない資料大好きイラストレーターさんに、格安のお値段で提供したいと思います。往年の良き図案からの、模倣と創造への参考書として、是非、お求めになつてみてはいかがでしょうか？



写真キ●カトー
モデル●ススキサチコ

雨が降っても傘が降っても読書三昧
通信販売専門古書店

晴読雨読堂

申し込み、型録の請求は全てファックスで
東京〇三(三四九七)一五九一

みんな貨幣をもって売買している、基本的には二者間の相対取引になつている。それが、人々の自由な意思決定を可能にしているわけですね。売り手は自分のつけられる価格をつけるし、買い手はそれが自分が満足する水準にあれば買うと。フリマは明らかにそうですが、競り人が価格調整をするんじゃないかと、当事者が自分で価格設定をしているわけです。僕はそれを「自律分散型の市場」と呼んでいます。

集中型の市場システムは、非常に効率的だといわれるけれども、こうしたシステムを維持するにはコストがすごくかかるので、実はそうではない。しかも、競り人にあたる中心部の制御装置がうまくいかなくなると成り立たないんです。すなわち、集中型では個人は本当の意味で自律的な意思決定を行う必要はないし、その意味で個のモラルや倫理というものも生じにくい。「効率」だけが問題となる。「コンピュータでいうと、昔のパソコン通信がそうなんです。みんな自分のコンピュータでつながっているんだけど、ホストコンピュータがダウンしたらアウトだったでしょう。それと対照的に、インターネットというのは、中心がなく、情報を小さく小分けにしてあつちこちに戻すというようなシステムです(それ自体、一種の貨幣のような機能を担っています)。その意味で自律分散型と言えろと思います。

LETSが市場の考え方を模倣するとしたら、まさにインターネ

ット方式の自律分散型になるでしょう。あくまでも個が主体として参加するのがLETSなのに、オークションで決めてくれて、決めてくれた価格で売りますという受け身の姿勢のままだったら、主体が立ち上がる契機がないじゃないですか。すなわち集中型では、個々人の意思決定は行なわれないし、その意味でモラルとか倫理というものも生じにくい。逆に、自律分散型であることが主体を成り立たせる条件でもあるわけです。

⑥「個」をどこまで「コミュニティ」に開いていくか

LETSの利用の仕方への応用例として、通常の現金と地域通貨との併用という事態が考えられるでしょう。たとえばこのコップが100円だとしたら、80円を現金で、20円を地域通貨で、という支払い方法も可能になるはず。その混合割合もいろいろ自由に設定できるわけですが、それが何を意味しているかというと、いまの例に即せば、われわれ個人というものの20%はオープンにしましょうと。自分のプライベートが丸裸にされて100%全部公開されるのは誰だっというヤダと思ふんですけれど、のこりは閉じていてもいいから、20%は開いてやろうと、そういうことなんです。ね。

たしかに全部開いてやる必要はないだろうけど、自分の内面をどれだけ開いて「コミュニティ」の中

に開いていけるか、人が出入り自由な部分を自分の中にどれだけつくつてやれるかという話になつて、そうするとやはり主体の問題と重なってくる。通常の商品経済では、売っているほうが買つてくれた人の情報を公開しなかったらまずいわけです、原則として。個々人の内面は閉じること、現金による日々の市場空間は堂まれているわけです。だけどLETSの場合は、最初から個人を開くということによって、言うならばアソシエーションをつくっていくことになり(もちろん通常のアソシエーションは閉じることでつくられますが)。いまわれわれは、様々な局面で開き方を問われているんだと思う。どうつな

がるかというこの前に、個々人はどう開くかということがまず考えられねばならないですね。その問題に対しても、LETSはあくまでもアソシエーションを出していくための恰好の思考材料となるでしょう。

もう一つ、複数の国民通貨をもつように、複数のLETSに属するという事態も考えられるでしょう。グローバル化の流れによつて、日本でも複数の通貨を資産として保有する人が増えていきます。それを、われわれの自己が分裂して多重帰属を始めたことの一つのあらわれ、と見ることもできると思います。われわれが日本人であるということのメルクマールは何かというと、もちろん日本国籍をもっているということもそうですが、日本の円を資産

としても持っている、ということが大きいんですね。それには、けっこうみんな自覚がないみたいだけれど、逆に、自分のもっている貯金の半分がドルになったりしたら、人間の意識は変わらざるをえないんです。それは、やってみたらわかりますけど。

インターネットの中のあつちこちのフォーラムに出ていくというのも、多重帰属のあらわれでしょう。LETSは、そのフォーラムをたまたま貨幣を軸にしてつないでみようという発想にすぎないであつて、何かまったく新しいことを立ち上げようとしているわけではないんです。各国の通貨を複数もちながら、複数のLETSにも属している、というほうがいまのわれわれにとってはむしろ、自然なんだと思います。多重帰属や分裂した自己といった考えを否定してしまつたら、結局は閉じた共同体、つまりマスのほうに戻ってしまいますから。

④そして若者には市場だけがのこされた

フリマに集まる若い人たちの様子を見ていて思うのは、彼らには「売る」という行為に対する抵抗がないんですね。かつては、売るといふことは他人の目を気にしなければならない、と出会うこと自体が恐ろしいことだから、商人ならともかく、一般人が物品を路上に並べて売ることなんてことはやっぱり気がひけるという意識があつたでしょう。それ

が、彼らにはまったくない。他人といきなりパチツと接触できてしまつて……。たぶんそれは、援助交際のあり方も通じるものがあると思います。他人に抵抗なくモノを売ることができ、身体を売ることまでできてしまう。それは、彼らが共同体の外に出たという歴史的事実を示しているのかもしれない。いかむしろ、

共同体的な規制とか倫理というものが全部崩れ去つた後に彼らが出てきた、ということなんでしょう。彼らは一様に政治意識が低いとか、倫理観に乏しいと言われている。しかし、それは彼らの問題ではなくて、端的に言えば、80年代の末から90年代にかけて、そういうものを一斉にわれわれが壊したんです。あらゆる局面において共同体的なエシックスとかモラルとかポリティックスというものが解放されてしまった拳句、市場のような、ある種の均質的な抽象空間の中にみんなが置かれるようになった、ということが言えるんじゃないですか。倫理とか政治とかあるいは言語の世界は解体されたけれども、やっぱりお金を介した市場はかろうじてのこっている。そこが最終的なコミュニティケーションの手段になつてい

換するといふことが「命がけの飛躍」だと、つまりモノを売るといふことは命がけの飛躍だと言つたんです。ところがこれ(フリマの若者たち)は、「命がけの飛躍」をするといふことをあまり考えているように見えないんだ(笑)。売るといふことが非常にたいへんなことなんだという意識がないでしょう、彼らには。

終身雇用の機能性というの何かという、自分の労働力を一度売つちやつたら、もう売らなくてもいい、ということですね。いつも市場の中で動くのはキツイといふことで企業に守られていたんだけれど、いまはそういうことをあまり考えていないどころか、どんどんフリーターが増えていく。ほんとうならフリーターといふのはサラリーマンよりもっとキツイわけですね。しかも、自分の労働力じゃなくてモノを売るといふのは、さらにもっとキツイように思ふんだけれども……まるで楽しそうですね。それは何なのか?

また買う側にも、自分は金をもつているんだ、お客様だ、神様だ、という特権的な意識があるとは思えない。これまで売り買いの場では、われわれはつねに権力関係みたいなものを意識していたわけでしょう。それがここにはまったく見えない。売り手と買い手が対等に横につながつていく感じ。ある意味で、LETSが開こうとしている新たな市場交換の関係性を、彼らは先取りしているのかもしれない。